

牧野陽子さんの人と業績

平 川 祐 弘

良き師、良き同僚に恵まれ、言論自由の国に生きた人なら、大学人にかぎらず、誰しも、幸福に思うだろう。「日本人に生まれて、まあよかった」と私が感じるのは、九十歳の生涯をかえりみでの実感である。良き家庭に恵まれた。それとともに、良き学生に恵まれた。そのことを私は学者人生の余慶にかぞえる。牧野陽子さんは、私にはそのような幸深き学生であった。はるかに年少の人と思っていただけに、二〇二〇年、成城大学で定年を迎えたと聞いて私も驚いた。乞われて、牧野陽子名誉教授退任記念号『成城大学経済研究』二三五号に、公私にわたる思い出を綴り、その人と業績を具体的に記すことで、あわせて私どもの比較研究の特色と意義を述べさせていただく。今回その著書を読み直し牧野陽子『ラフカディオ・ハーンと日本の近代——日本人の〈心〉をみつめて』（新曜社、二〇二〇年刊）のごときは鋭い考察と示唆に富む、日本の人文学の珠玉の作品と感じた。

成城大学と私

成城大学と私のつきあいにまずふれたい。私は駒場の生え抜きで、そのキャンパスが東京大学教養学部となる一年前の一九四八年、満十六歳の時から、一九九二年満六十歳の定年退職の時まで在籍した。そこでは一・二年生にフランス語とイタリア語、三・四年生と大学院生に比較文学比較文化を教えた。

初めて成城大学で非常勤講師を務めたのは一九八三年、一学期、国文科で小泉八雲ことハーンの再話文学を教えた。すると年配の女子大学院生が、ハーンの『おしどり』の女主人公は、『古今著聞集』の原作の女が一人残された淋しさにたえかねて夫の遺骸のかたわらで自死をとげたのと違って、夫を殺した狐師を怨むあまり、その狐師の目の前でわが嘴くちばしでわれとわが腹を引き裂いて死んだ。それは壮烈だが、言ってみれば面当てつらあの死である。だから、原話に比べてハーンの再話は後味がよくない、と指摘した。小泉八雲の『怪談』に詳しい人なら、これだけ聞けば、問題の所在が奈辺なへんにあるかわかるだろう。ハーンは再話することで女主人公を人間化した。——そういう肯定的評価がある一方、ヒロインの西洋女性的ともいえる自己主張する女への人格変容に対しては、否定的評価もまたあり得る、ということである。《おしどり》再話の評価は、比較研究とはいかなる文化を価値基準に測るかで評価が逆転する一例ともいえよう。同じく日本人読者でも、英米文学科の学生が、自己主張するハーンの再話のヒロインを良しとする傾向が強いのに対し、国文科の年配の女性がそれを良しとしなかった。その正直な違和感の告白が印象に残った。成城に非常勤で出講してよいことを教えてもらったと思った。

世界の中の日本を比較する学問で大切なのは、まず客体としての研究対象の比較である。だが、判断を下す主体の価値判断の基準そのものも、研究対象に劣らず、吟味すべき大切な点なのだ。それを世間は見落しがちなので、その点にも注意したい。何を物差しに使うかで評価は一転する。

その一九八三年、成城大学に就職したばかりの牧野講師の研究室に一度立ち寄った。若い日の牧野さんは内気で、年長者に電話をかけてくると声がいかに緊張していた。昔はそんな人であっただけに、定年と聞いて私も家内も驚いたのである。

覇権的な大文化と周辺文化の関係

そのほかにも成城大学で一回限りの講義を何度か依頼されたが、一度は教授諸賢のいる席で「聖書とガス室」と題して話した。講演内容は北山研二編『文化表象のグローバル研究』（二〇一三年）に発表した。竹山道雄と親交のあったロゲンドルフ神父がなぜ竹山と絶交したか、その背景と経緯が如実に示された一九六三年三月二十一日付の神父の竹山宛手紙のドイツ語原文もあわせて活字化したものである。¹⁾「グローバル」という北山教授の研究会の発想は、グローバル化が進行する際にローカルな文化はいかなる運命をたどるか、という問題の表裏をあわせ考えた上での *global* という造語かと推察する。

牧野教授や私どもの比較文化研究は、表のグローバル化の裏で生じる変容を *globalization and creolization* として考えるようになった。グローバル・スタンダードという標準に従うべきなのか、その過程には無理も生じるの

ではないか。その際、比較研究のアプローチはいかにあるべきか、等については、本稿の結び近くでふれる。霸権的なメイジャーな西洋文明とマイナーな周辺の文明との関係も、日本人の関心を惹く。私たちのその種の問題意識の中には西洋キリスト教文化と日本の神道文化との関係も含まれる。

成城で二〇二〇年一月十四日火曜一時から行なった講義は、おそらく私の成城での最後のクラスだろうが、その種の問題意識に発する。国際文化関係論 *intercultural relations* の一例として「白禍と黄禍」についての平川解釈を話した。霸権的な白人勢力の地球大の支配を歌い上げたキプリングに対する徳富蘇峰ら黄人の反撥の話である。私は歴史を好み、*Cambridge History of Japan* にも寄稿した者で、比較文化史家と自称している。しかし出身を異にするせいも、大学入学共通テスト試験問題などに示される「受験派史学」とはどうも性があわない。唯物史観を奉ぜぬ者は歴史学者に非ずといわんばかりの戦後日本に^{びまん}瀰漫した雰囲気^{びまん}に不満で、それで言葉に即した人文主義的アプローチを重んじた。

成城のクラスでもハンドアウト一枚のテキストを基に説明し、最後の十数分、学生に感想を書いてもらう。そのゼロクス・コピーを事務が送ってくれたが、若い人々の、(中には傍聴の年配の方の)、意見も知ることが出来て楽しかった。なおこの講義原稿を含む『昭和の大戦とあの東京裁判』は雑誌『正論』に二〇二〇年二月号から十六回にわたり連載し、河出書房新社から単著として出す予定である。連合国側関係者が棄却の形で無視した東京裁判の日本側被告の主張に聴くべきことは全く無かったのか、両者の主張に耳を傾け、比較考量した上で、パランスのとれた判断を下すことが学者の使命であろう。昭和の大戦にも東京裁判にも広い意味での異文化の対決という側面があった。なおこの講演に平川を招いた責任者は牧野教授であるから、この拙著に対し、解説なり批

評なりを書く義務があると信じている。

学問の宴

以上が成城大学と私の関係である。その間に何度か御馳走にあずかった。新築された小田急の駅ビルの最上階にレストランがあり、食前には西の方に富士山が白く見えたが、食後は日陰の灰色に変わっていた。講演や発表のあとで共にする学問の宴の心地よさは格別で忘れがたい。米国人 Ronald Morse は柳田国男の『遠野物語』の英訳者だが、Yoko Makino: Lalcadio Hearn and Yanagia Kunio: Who Initiated Folklore Studies in Japan? を読んで蒙啓かれ、牧野さんに会いに来た。そのときは私も御相伴にあずかった。私が牧野論文を載せた *Sukehino Hirakawa ed.: Lalcadio Hearn in International Perspectives, Global Oriental: Folkestone Kent, UK, 2007* の編者だったからだろう。

成城学園前駅と祖師ヶ谷大蔵駅との間にはフィオッキという料理店——Fiocchi とはイタリア語で「雪片」な

- (1) ほぼ同じ内容は平川祐弘『竹山道雄と昭和の時代』（藤原書店、二〇一三年）の第十六章として発表した。この書物には Roggendorf 神父のドイツ語原文は載っていない。竹山道雄はナチスの悪を追究した人だが「しかしユダヤ人憎悪はキリスト教の遺産であることは疑いない」という歴史的視野に立つ観察も加えた。その「聖書とガス室」という視野の設定がロゲンドルフ神父の不興を買ったのである。竹山の問題提起も西洋における覇権的なメイジャーな宗教文明とマジナルな周辺のな宗教文明の間との摩擦・衝突の問題ととらえることもできるだろう。

どの「片」の意味と私は憶えていたが、あれは「豪勢でうまい」という熟語の意味で使ったのだろう——で晩餐ばんさんの祝杯をあげて、夜道を御一緒したことがある。道に迷ったことも楽しさのうちであった。牧野さんは健康な美食家で、食後の飲み物の注文も細かい。夫君は財務省の高級官僚だが、仕事柄、外食の機会が多く、帰宅が遅い。それで牧野さんは私どもと付き合う時間もあつたのだろう。東大比較出身の女子大学院生は、初めの内こそ学者同士で結婚したが、そのうち官僚との職間的な結婚がふえた。配偶者が二人とも教師であると、付き合う世間が狭いせいか、キャンパス・レフトの正義女史になりがちで、とくに夫婦とも『朝日新聞』の読者の場合はそれが多かった。それに反し、職際結婚の場合にはよりソフィステイケートされた多様な意見の持主が出るかに見えた。ただその女性たちの多くが、夫君が外で夕食をする機会が多いので、食事の世話をせずにすむ、気が楽だ、と話すのを聞くと妙な気がした。

牧野学生と私

ここで昔の学生時代の思い出にさかのぼる。一九七六年、牧野さんは東大駒場の教養学科イギリス分科を経て比較文学比較文化の大学院に進学した。その前にも私たちは、時こそ違え、同じ場所にいた事に後から気がついた。私は牧野さんが生まれる前に大学を卒業、昭和二十年代末から仏独英伊に六年留学、インド洋を三度横断した最後の洋行世代だが、牧野さんは父君の通産省の仕事の関係で、「もう戦後は終わった」昭和三十年代後半から八年、うち小学校二年までの四年は米国で、小学校高学年から中学二年の十二月までの四年はドイツで過ご

し、帰国した時は満十四歳だった。ドイツのボン時代、英国大使館付属小学校で学んだ体験が、近著『ラフカディオ・ハーンと日本の近代』のあとがきに美しく回想されている。なるほどこのようなエリート校で少女時代を過せば英語もドイツ語も同時に身につくわけだ。

それより十年前、私はそのボンに留学したが、パリと違ってドイツ人は背丈が高い。当時の西ドイツの首都の大学にはクロークがあつて、学生たちもそこに外套を預ける。その大きい鏡に近づいてくる自分の全身が写る、その姿がいかに小さく貧相に見えた。一度パリから訪ねに来た人たちと一緒にケルンへオペラを見に行つた折、上着を新調しようとデパートに入ったが「子供の部へ行きなさい」といわれた。これは二十六歳の貧乏留学生が痩せこけていたことも関係したに相違ない。当時の私は朝飯抜きだった。ドイツ大統領の前でピアノを演奏した少女とは別世界に生きていたのである。

お墓詣りの共通性

その牧野さんがボンでの万霊節のお墓参りの話をするから、私は手紙を書いた。これはそのまま牧野陽子『ラフカディオ・ハーンと日本の近代』の感想となり、かつ私たちの神道研究の通奏低音ともなるので、そのまま引かせていただく。

五月から七月にかけてボンでは午前三時に空が白んできました。それを記憶しているのは Stefan Zweig, Die

Welt von Gestern を夢中になって夜を徹して読んだからです。同じボンのことを陽子さまは、お盆にも似た十一月の「死者の日」とお書きですが、私は一九四八年の秋、駒場の本館一階の西側の教室でこんな Das Totenfest の文章を水上英廣先生から習いました。Wenn der Herbst ins Land kommt und die gelben Blätter von den Bäumen und Büschen fallen, dann gedenkt jeder Mensch seiner Toten und übt den schönen Brauch, die Gräber all derer, die einst ihm nahestanden und nun in kühler Erde ruhen, mit frischem Dauergrün und mit den letzten roten und weißen Ästen zu schmücken.

ドイツ語はどれほど憶えていらっしやいますか。私は Du bist mir lieb. とか Ich möchte gerne Dich umarmen. とか、いま書いていると思ひ浮かびます。

あなたの暮れ行く年の思い出しみじみとしてドイツと日本の対照もこよなく美しい。北国の雪見障子を上げて庭を眺めていた小柄なお祖母様の点描などすばらしい。「冬の燈火」とはいい題のいい文です。《ハーンとグリフィス——日本のこころを求めて》にはあなたの感受性が生き生きとよみがえる。学術作品が芸術作品になるといい。全編が牧野作品となるような、一貫性が色濃く出ると好いですね。

戦後日本の貧しさをひきずついていた留学生と、高度成長期の急激に豊かになりつつある日本の在外勤務の高級官僚の令嬢では世界が違う、と書いたが、それでも重なることは幾つもあった。焼夷弾の殻が校庭の隅にごろごろ転がっていた焼け跡の借校舎で学んだ私（五十八回生）はまだ男子校だった東京高等師範付属中学の生徒だが、その後身の東京教育大学付属高校に、帰国した牧野生徒は八十回生として入学した。そんな海外帰国子女に

ついで私が感心するのは、身についた日本語日本文化の深さである。牧野さんは前著『二時』をつなぐ言葉——ラフカディオ・ハーンの再話文学』（新曜社、二〇一一年）で、民話を語る母を語って秀逸で、ハーンの母のローザや作中の乳母ユーマを論じているが、そこに著者の母君の息吹がそこなく感じられる。寝る前に母親が話を聞かせて育った子供は、海外育ちであろうと、日本語の感受性が血肉化している。それだから日本の高校への受験も、東大への入学も、すらすらといったのだろう、牧野陽子のアイデンティティーの形成とその比較研究のモチベーションとは密接に関連している。外の世界に曝さらされた日本人は、自国の文化を内外の人に説明する立場に立たされる。国内育ちの日本知識人が、同国人に向けて外国の優越性を語ることで、自己のインテリゲンチヤとしての優位性を維持しようとするのとそこが違う。世の常の大学人と異なるスタンスが生まれる所以だろう。

父君の牧野隆守氏は通産官僚として在外勤務の後、中曽根康弘氏に声をかけられ福井全県一区から衆議院に立候補した。その選挙運動の手伝いだろうか、福井へ戻ったとみえて、大学院に入学したはずの牧野さんが顔を出さない。そのとき私が手紙を書いて授業への出席を勧めたというが、面接や答案の印象がそんな手紙を書かせたにちがいない。

記紀歌謡の詩的価値

『古今著聞集』の『おしどり』にかぎらず、ハーンが利用した日本語原典とハーンの再話英語作品の比較調査

は大学院生多数の興味を惹いた。そしてそれを手掛かりに牧野陽子の学問世界もまた花開くこととなる。

明治時代の西洋の日本解釈者は Basil Hall Chamberlain (1850-1935) と Lafcadio Hearn (1850-1904) が双璧だが、ハーンは一八九〇年の来日に際しチェンバレンが英訳した『古事記』を読んで非常な興味を覚えた。私はそのこともあって『古事記』の冒頭を原文と英訳で読む演習を何度か繰り返した。昭和四十六、七年、まだ東大駒場が荒れていて過激派学生に占拠された本館で授業ができなかった時、いまは取り壊された南寮の一室で教えたことがある。男子学生たちに「あなにやし、えをとめを」女子学生たちに「あなにやし、えをとこを」の順で大きな声でいわせて皆で笑った。そしてジョン・ペルゼルの《日本神話における人間性》という論文もあわせて読んだ。文化人類学の増田昭三教授は「Palza が面白いですか」と言ったが、その論文は興味深かった。

私はさらに学生たちを松江や隠岐に連れて行った。その中で結婚した者もいる。またある年は、一畑電鉄で出雲大社まで足を延ばした。社頭で隣の女子学生が手をあわせて熱烈に祈る。私は二礼二拍一礼して頭をあげたものの、拝み続けるその人の、良き縁に結ばれることを祈る一心な思いにおされ、その場を去ることもならず立っていた。

一九七六年の大学院演習でも記紀歌謡を読んだ。牧野さんは八号館三二四教室入口近くの席に座る。教室の奥の北側の窓側までは入って来ない。当てたのは沼河比売が「未だ戸を開かず、内より歌ひけらく」の歌と思うが、日本語と英訳をまず読ませた。読み方一つで「この人は詩がわかる」と感じられた。大学院生を私は二つに分けた。詩がわかる人とわからない人である。世の中には生まれつきの「詩痴」がいないとは言わない。しかし本人が「詩がわからない」と思いこんでいるのは、高校の国語教科書などに編者が小難しい詩を載せるからいけ

ないのだ。世の中にはわけのわからぬ詩がわかったような顔をする才人がいる。それが若者の特権なのかもしれないが、そんな偉そうな口の利きように気圧けおされて、自分は詩がわからない、と劣等感に囚こわれる人が出る。⁽²⁾しかし牧野さんはセンスが良くて、自己があつて、周囲の学問的事大主義に対し違和感を抱くことはあつても、その種の劣等感にさいなまれることがおよそなかった。沼河比売の歌を読み了ると「官能的」と評した。

『古事記』の英訳者でありながら、記紀歌謡の詩的価値を全否定するチェンバレンに対し、「なにを言うか」と言う気持があり、とにかくまず原文をすなおに読もうとしたのである。まず原文をすなおに読む。英訳とその解釈も参照するが、日本側の解釈も参照する。和辻哲郎の『日本古代文化』中の記紀歌謡についての論も読んだ。

私どもの比較日本文化論の研究にはこの種の違和感から出発するものもあつたことも述べておきたい。ちなみにチェンバレンは神道を無価値と評し——これも私にかぎらず違和感を覚える人はいるだろう——ハーンと対立した。西洋の代表的な日本研究者には神道は内容空虚で、伊勢神宮も掘立小屋程度の代物と評する人がいた。日本人にも「その通り」と同調する人もいるだろう。しかしその程度の神道理解に基いて国家神道の解体を命ずる『神道指令』が出されてはたまらない、と思う日本人が出て来ても不思議ではないだろう。

- (2) これは外来の新思想などの流行についても似た反応が見られた。外来思想の日本での代理店のような仕事を得意とする仲間に対しても私には違和感があった。私が駒場寮にいた頃は「唯物弁証法」という言葉が唱えられた。フランス語教室に入りたての頃は「エクリチュール」などの語がはやった。しかしそれはスノップの間だけで通用した学問世界のおまじないの言葉にとどまったような気がする。

言語芸術家

牧野さんが修士論文を提出したとき、私は米国に長期滞在中で、審査に関係しなかった。比較の大学院は毎年十名前後の論文提出者から二名を選んで、四月の新入生のガイダンスを兼ねた八王子のセミナー・ハウスの合宿で発表させる。教授側も一人発表する。この二日間のオリエンテーションは強烈な印象を新入生に与えた。通過儀礼に似たイニシエーションである。一九六八年の十二月、研究室が過激派学生に占拠された時、難を避けて創めたのがきっかけだが、それが年中行事として続いた三十年が東大比較文学の最盛期であった。「牧野発表はすばらしかった。話し終えた時にははらと涙が散った」と芳賀徹が在プリンストンの私に手紙をよこした。牧野さんは民芸運動の柳宗悦を扱った。柳はラフカディオ・ハーンの日本に対する共感的理解に感服し、自分は朝鮮におけるハーンになろうとした人である。ハーンは民話に着目し、柳は民芸に着目した。

一九七九年、帰国した私は恒文社の『ラフカディオ・ハーン著作集』第一巻『アメリカ雑録』の責任編集者として、友人の仙北谷晃一と、私の演習出席者の中から池田美紀子、河島弘美、牧野陽子の三人に、訳を依頼した。教室で接すれば、学生の英語読解力、日本語表現力はおのずとわかる。戦後育ちの才女たちに「やめてくれ」とそのとき私が頼んだ唯一のことは、昆虫名や植物名をカタカナで書く慣行（それが戦後教育の方針）であった。後に私は講談社学術文庫で『小泉八雲名作選集』六冊も編訳したが、その時は遠田勝、西成彦、杉田英明、前田式子、銭本健二などにも協力をお願いした。その際に私は《雪女》を訳したが、世紀末〈宿命の女〉の

変容として雪女を説明した牧野論文中の引用の牧野訳に眼を瞠みはった。その見事さに平川訳を書き改めねばと感じたほどである。

私は大学院生に学会で発表しないか、とか外国語で発表しないか、とか旅費は出せるから外国でのシンポジウムに参加しないか、と声をかけて誘った。私は publish or perish の原則に自分自身忠実に生きたが、学生に対してもその原則で臨んだ。私は業績すいげんによる推輓を心がけ、出来のいい発表をしかるべき出版社に推薦した。「機会は前髪で掴め。後ろは禿かぶげている」。しかし私の誘いに即座に応じる事のできなかった人は、平川に見放されたと感じたかもしれない。

業績による推輓

一人娘として両親から鍾愛しゅうあいされた牧野さんは、結婚しても牧野姓であった。大蔵省の官僚を婿に迎えたからである。結婚後も国内外へ皆とよく旅に出た。台湾の阿里山で朝早く一緒に散歩したこともあれば、二人で松江で講演するよう招かれたこともある。到着すると会場は大変な人だかりで、中に入ることもできない。何事かと驚いたが、それは大ホールで公演する歌手の松田聖子がお目当ての群衆だった。小ホールの入りも辛い悪くない、面目をほどこした。休憩後、小林正樹監督の映画『怪談』が上映される。はじめて見た私は怨みをのんで死んだ女の黒髪の流れるような映像に強く印象された。牧野さんはドイツですで見えていたが、怖くなり、「こわい。今夜は眠れない」などと無邪気に言った。私どもを招いた梶谷泰之先生は、「英文科で皆さんのような血の

通った講義は聞きませんでした」と褒めて下さり、ハーンが好んだもづくなど土地の野菜を何度か私どもに贈ってくださった。

牧野さんは一九九二年『ラフカディオ・ハーン——異文化体験の果てに』を中公新書で出した。その本の書評〔東京新聞〕一九九二年三月十五日に「松江の国際会議でも、銀鈴を鳴らすような美しい英語でハーンの《雪女》に影を落としたボードレルについて語って会場を恍惚とさせた著者」と書いたのは私である。

私たちは外国でも二人続けて発表した。私が攻撃的な調子で硬派の英語発表をすると、牧野さんが穏やかな美しい英語で話す。一番バッター平川、二番バッター牧野のコンビがよかった、確実に連続ヒットで出塁したという感じで、外国人学者にも一目置かれた。退屈な発表をされると聴衆が席を立ってしまうから、発表者の出来不出来は選別せねばならない。西洋は学問的淘汰の厳しい社会なのだ。

だがアテネ大学での第二番の牧野講演の中身の記憶がさだかでない。牧野さんから「撮ってください」と映写機を渡され、その撮影に追われたせいだろう。機械には録音機能もついていたに違いないから、一度また聴きたいものだ。私はまたハーンが泳いだ海で水に漬かるのが趣味で、隠岐の島でも皆と泳いだ、ギリシャではジョージ・ヒューズ教授も突然水泳パンツ姿であらわれ「平川さんは学問を快樂にする名人だ」と言って笑った。青いアテネの空であった。

日本で人文系の大学人に科学研究費が潤沢に開始したのは平成にはいつてからだが、お蔭で私たちも内外へ次々と出張できた。慶州と柳宗悦、遠野と柳田国男、屋久島と林芙美子など、牧野論文は、その旅行の刺戟もあって書き上げられたといえるだろう。河原に一面に咲いた韓国のコスモス、引き潮時にはいることを得た海中温

泉、などの風景は忘れがたい。夕日を浴びて巖頭に白鳥がとまっていた。

二〇〇四年、ハーン歿後百年を記念して東京では東大駒場と早稲田、西宮では大手前大学、さらに松江、熊本と連日各地で順に学会を開き、キャラパンを組んでハーンゆかりの地を巡った。内外の多数が参加したので *International Herald Tribune* の記事になったほどである。ハーンが明治二十三年八月末、姫路から人力車で越えた中国山脈の道はあらかじめ実地検分した。国際学会参加の有志にはその道を仕立てたバスで行ってもらった。ハーンの曾孫の小泉凡氏は成城大学で民俗学を学び、牧野教授が私に引きあわせに渋谷まで連れてきた。その学生の時からもう世慣れていたが、今では出雲の名士で、一行を上手に案内した。

西宮と松江の学会の間にベットの世話のために一度東京へ引き返す女性がいたのには驚いたが、私たちは松江の学会講演の合間に嵩山がけやまに登った。旅先で病んだ夫は病死して帰らない。待ち続ける妻はこの山の頂きで石になる。それは愛情あるがゆえに悲しい伝説である。『成城教育』一二三(二〇〇四年三月)号に寄せた牧野さんの《春の色、春の想い》はこの高山伝説とソフィア・ロレンの映画《ひまわり》を並べて論じた随筆で、背景に美しい視野が広がるが、悲劇がある。人間、思いもかけず辛い運命に襲われることもある。

旅先の発表

旅先では不測な事が起こる。一度、旅行中の宿で予定されていた発表を牧野さんができないと言い出した。私はいつも講義は準備し定刻に始めることで励みとしてきた。そんな堅物だから、不機嫌になる。その気配を察し

た牧野さんが、冬の宿で夜遅くまで用意し、翌日の発表に漕ぎつけた。その結果も単行本『(時)をつなぐ言葉——ラフカディオ・ハーンの再話文学』(新曜社、二〇一一年)の一章ともなり博士論文となっている。その科学研究費による山形旅行の後に、私は次の手紙を書いた。「なにとぞお許しも願ひあげます」と書いたのは、珍しく立腹した自分を照れて、かんじよ寛恕を乞うたのである。

お元気でいらっしゃいますか。

雪の羽黒山を歩くという印象深い最終日に終った旅の日々に比べて、東京に戻ると日常的な時間だけがどんどん早く過ぎてゆきます。『熊本日』のゲラが西原の家へファクスで届いた時は「先週の水曜日には日本海の浜辺近くでファクスを受取ったのに」と思いました。今回の山形県の旅も、一昨年の岩手県の旅と同様、陽子さまがプランを立ててくださったと、細部まで見るものも食べるものも充実して、楽しんでございました。旅行にも日に日に愉快がつのる *crescendo* の楽しみがある、とつくづく感じました。お礼申しあげます。そしてまたなにとぞお許しも願ひあげます。

それにしても銀山温泉では午前三時まで準備をなさいました由、お疲れが残りませんでしたか。お電話でお風邪声でしたので心配になりました。ご無理を申して失礼いたしました。しかし湯野浜温泉では素晴らしいお話を聞かせていただき、本当に嬉しかったです。あの宿が一番良かったのはひとえにお話ゆえです。陽子さまのご遠慮は、一面では慎み深いお人柄ゆえとも思いますが、過度の引つ込み思案は短所であるとも思いません。芸術的な感性に恵まれ知性豊かな陽子さまのお話を、私は日本語であれ、英語であれ、いつもほれほれと

して拝聴している一人です。アイルランドの旅でも一番印象に残ったのは陽子さまのお話でした。それは皆さんそう申しました。いつも私などの思いもつかぬ点をはつきりと掴んで引き出して指摘なさいます。それなにご自分ではいつも「駄目々々」とおっしゃる。「牧野さんが発表しないなら僕は東京へ帰るよ」と申したら——私は学術報告抜きの科学研究費の使用は考えがたいことと思っている人間なものですから——誰かが「平川先生御乱心」といいました。そうか、これでは本当に帰りくださるを得ないか、これで長のお付き合いも終わりになるのか、「それならどうぞご自由に東京へお帰りください」といわれてしまうのか、などいろいろな思いが心中を駆けめぐって、それこそ心が乱れた時がありました。こうしたことで人間が別れ、同学の縁が切れ、別々になってよいことか、などと一面では思い、いやいやそうしたことはそもそもありえないと他面では打ち消していました。

——それがハーンが横浜で車夫に向って発した最初の言葉、「寺へイケ」は「開ケ、胡麻」に相当する、という見事な設定であなたの話が始まり、アラビアン・ナイトではないが、私にまで新世界が開ける思いがしました。本当に「開ケ、胡麻」でした。

ところで陽子さまが今回のご発表を近日中にペーパーにまとめるという指切りのあの約束は最高に良かったですね。酒田はそれで末永く祝福された土地となりました。——それからあのような神話的ともいえる牧野陽子式構造把握で論文を始め、いろいろな物語分析を上手に組み込めば、博士論文がもう出来すね。そろそろおまとめになる方がよきはございませんか。御論文がいつまでも出来上がらないと、私ども二人の共著(3)に取り掛かることができずに、私は年をとってしまいます。

『〈時〉をつなぐ言葉』講評

『〈時〉をつなぐ言葉』を読み返すと、前にもまして言葉の魔力に魅せられる。音楽によるたとえは、仙北谷晃一氏のその種のたとえもそうだが、適確さにも感心する。しかし「地底の青い空」を論じて、青と黄の色合いについてジョットの宗教画を連想したのは、これはもうハーンの原作以上にすばらしい。ハーンも牧野解説者ほど自覚していなかったらと思う。ここでは論文審査当日の質疑や講評より、同書が同年四月一日受賞した際の私の挨拶を掲げることにした。東大駒場学派と呼ばれた比較研究のアカデミック・アトモスフェアはこの種の記録にうかがえるだろう。

牧野陽子さま

島田謹二賞の受賞をお祝い申し上げます。『時をつなぐ言葉——ラフカディオ・ハーンの再話文学』については二〇一二年三月十二日、東大で博士論文審査が行なわれ、私も審査員として招かれ、比較の大学院を定年退職して二十年ぶりに公式行事に参加しました。弥生道を歩きつつかぞえたら、私が駒場の地で島田謹二先生からはじめてお習いしてから六十四年が経っていました。今日は島田先生の思い出にもふれつつお話いたします。

牧野論文は日本で小泉八雲についての初めての本格的な博士論文かと存じます。論文審査は充実した三時間

で、エリス俊子さん、井上健氏、佐藤光さん、主査の菅原克也さんの質問する方もすばらしく、答える方も見事でした。牧野さんは小泉八雲の再話について日本人の妻節子との合作という「絵になる場面」にとらわれることなく、本質的な意味があると感じたことをあらかじめよく考え抜いた上でのお答えで、聴いていて興奮しました。すばらしい音楽会に行った日は、夜寝つかれない。なにか狂おしい気持さえする。それと似たたかぶりがその夜身内に長く残りました。『時をつなぐ言葉』の中では、ハーンのそれぞれの物語がそのテクストが求められている読み方に応じて読み解かれている、牧野さんの人生をかけた共感が本書には出ている、と皆さま絶賛なさいました。牧野さんは一九九二年に『ラフカディオ・ハーン』を中公新書で出版されましたが、それに対して佐伯彰一先生が牧野さんは補助線の引き方がうまい、といわれましたが、今回も牧野さんがハーンとモースとを並べる、ハーンとチェンバレンとを並べる、そのジャパノロジストの中でハーンの特色を浮かび上がらせるやり方が見事と感心しました。牧野さんの並べ方はハーンとチェンバレンを敵対させるのではないところが心憎い。ただし私は、子規の俳句「うそのやうな十六日桜咲きにけり」の句を子規の名を伏せて引いたのは、再話作品として話の文脈の広がり知らしめるためだという牧野解釈は深読みに過ぎはしないか、牧野さんが時をつなぐ言葉の無名性という想定にあわせた解釈ではないかとあやぶみます。いざよい桜と読むべき

- (3) 私どもの共著とは平川祐弘・牧野陽子著『神道とは何か——小泉八雲のみた神の国、日本 What is Shintō? Japan, a Country of Gods, as Seen by Lafcadio Hearn』(錦正社、二〇一八)というバイリンガル版で、明治神宮の売店などで求めることが出来る。これは西洋側の神道理解の中でハーンの解釈を良しとする見方で書かれた。

句をじゅうろく桜と読み替えたのは作品内部の十六日という表現と辻褃を合わせるためでしょう。自分を東大から押し出した夏目漱石の名前も知らなかったハーンですから、正岡子規がどんな人かも知らなかったまでだと私は思います。

なにか細かいことを申しましてわからないと芳賀さんが今いわれましたが、審査当日も問題点が何であるかは牧野さんと私以外は、傍聴に見えた関田かをるさまを除けば、審査員の諸先生にもおわかりにならなかったろうと思います。審査当日もそれで関田さんが傍聴席から不規則発言をして菅原主査にたしなめられました。

しかし「神は細部に宿り給ふ」と申しますから、そうした点が大事なかもしれません。私はハーンは意図的に子規の名を伏せたとは思わないが、この句を冒頭に掲げること、十六日桜という素朴な伝説を宿した桜の花を愛で、歌を詠むことで言祝ぐという古代以来の感性が今なお生きている、それを祝し、そうすることによってハーン自らも冬の桜を歌う言葉の系譜にこの物語を再話することによってつらなつた、という牧野解釈は傾聴に値すると思いました。そして、私は当日審査員の皆さんと牧野さんのやりとりを聴いていて、この論文審査そのものがすばらしい出版記念会だと感じました。駒場学派は健在なりの感を新たにしました次第です。

publish or perish という倫理的な格言は、個々人の学者についてもあてはまるが、大学の学科そのものについてもあてはまる。東大比較文学は今から五十一年前の一九六一年、島田先生が定年で去られた後の一時期「産みっぱなし」と評されたほど沈滞しかけましたが、菊池榮一先生が博士論文を提出され、ついで記念論文集を次々と刊行し、とくに第一回生など博士論文提出者が大学院担当者として母校に戻るに及んで盛代を迎ええした。思い返しますとあのころは鷗外に詳しくない学生は比較の大学院に進学して疎外感を覚えたと言え、皆さん後か

ら苦情を申しました。近年は小泉八雲に詳しくないと疎外感を覚えてブログに悪口を書く小谷野敦などもあらわれました。今回の牧野さん以下の遠田勝・大貫徹のハーン研究の新曜社の三冊はいずれも『小泉八雲事典』や『講座小泉八雲』をふまえた結果でありまして、その『講座』執筆者の中の出来映えのいい三名に新曜社の渦岡賢一さんが目をつけて単行本執筆の機会を与えてくれ、それで日の目を見た次第です。牧野さんは原稿提出は一番遅くて、本は一番厚くて、一番編集者に迷惑をかけた。しかし賞をとられたのは一番年季がかかってきちんと熟成した牧野作品だからだと思います。ご本人は自分の書いたものとはとても本にはならないと当初は尻込みしておりましたが。

『講座小泉八雲』は平川・牧野編集で書物の背中に二人の名前が並んでいることは嬉しいことでした。渦岡さんは『小泉八雲事典』にならってさらに先には『森鷗外事典』を構想していますが、現在の駒場には鷗外研究の若手が育ちませんでした。それは淋しいかぎりです。小泉八雲研究はさいわい裾野がひろがり globalization と対をなす creolization の問題にも光を投じつつある。それは嬉しいかぎりです。このハーン研究は私どもが現在編集している *Complete Letters of Lafcadio Heurn* などが刊行されるならば、さらに新展開をとげるであろうと予感しております。

牧野さんの先日の口頭のプレゼンテーションは見事でした。いや御本そのものの語りが、ハーンの語りにとらずそれは見事で、三月十二日は論文審査が一つの芸術的・学術的イベントでした。当日傍聴者は多かったです。しかし大学院生がもっと聴きに来れば良かったと惜しまれてなりません。あれほど面白い教育的な機会はそう多くはありません。西洋ならば新聞の学芸欄の記事になるところです。比較でもかつて今橋映子さんの論

文審査の際に読売新聞の記者が取材しましたが、牧野家では傍聴されたお嬢さまが未来へその日のお母さまのことを語りついでゆくことでしょうか。

ところで島田謹二先生はいまや御自身が博士論文の対象とおなりです。橋本恭子氏の『華麗島文学誌』とその時代——比較文学者島田謹二の台湾体験』は戦後民主主義世代の著者のイデオロギー的立場が見え見えで、それが橋本さんの博士論文の価値観の座標軸となっており、それでばっさばっさ、割に簡単に切っている本であります。私橋本さんにそう手紙で書きましたら「それが一番厳しいご意見」というお返事をもらいました。ところで橋本さんが書いたように島田先生はフランスの人文をたいへん高く評価し多くを学ばれました。中島健蔵などが比較文学に色目を使ったのはフランスで比較文学が盛んだからそれで日本でも口先で唱えただけでした。そうした西洋の学界の流行を追うのと違って、島田先生はフランスの比較文学研究をよく読み、それに通じていました。その島田謹二にとってフランス派英文学は仰ぎ見る存在でした。それだけに牧野さんが『比較文学研究』四七号の書評で Bernadette Lenoire の英文学研究としてのハーン研究の博士論文にきびしい評価を下した時に島田先生は意外の感をお持ちのようでした。しかしルモワヌはお会いになった方もおわかりのように労作をものした学者ではありませんが大した学者ではありません。牧野さんの書評は徹底的にルモワヌを審査した一大論文でした。牧野さんは完全に外国の学者と対等にやりあっている。フランスの博士論文だからといってものおじしない。それは一九八五年のことでした。牧野さんはその後、外国の学会で外国語で発表し、外国でもハーン研究の書物に多くの論文を公刊し、この分野では世界をリードしている日本人の一人です。そうであればこそ外国人と知的にわたりあつて対等感がある。それでフランスを無批判に仰ぎ見

るような真似はしないのではないかと思います。ただ単に海外帰国子女であるからというだけではありません。牧野さんは穏やかですが、昔から強い自己をお持ちで私が文章にいろいろ手を入れても、それはことごとく斥け、あくまで自分でルモワヌの書評を書きました。師に盲従してはなりません。本席には小林信行様もおられますが、島田先生の伝記も *hagiography* であつてはならないと思います。

博士論文審査の模様をお話しましたが、審査それ自体がめでたい行事であつた上に、この本に対してはこのたびさらに島田謹二賞が授けられました。あらためて牧野陽子さんにお祝い申し上げます。一九九二年の中公新書出版の祝賀会にはお母さまはお見えになりました。どうかそのお母さまをお大事にしてください。その出版記念会に島田先生はお亡くなりになる前の年でしたが信子様と一緒に見えて、この中公新書の評伝について、「著者はハーンの作品と先行研究に精通し、その上で書いている」といわれました。近ごろはそれだけの手間暇をとらない人がいる。しかしもし島田先生が今度の作品論をお読みになれば「自分にはとてもこうは書けない」と正直にいわれるのではないかと想像いたします。どこがどう違うか。私の学生時代、ジャン・マルティノンというオーケストラ指揮者がいてフランス人の彼は音楽にたいしても理知的にも感性的にもエクスプリカシオンを施したから、情熱的な形容詞を連ねる雄弁の演奏と違って、音の一つ一つが珠を転がすように美しくくつきりと個性的に響きました。牧野さんが解釈し演奏すると、小泉八雲の作品から一語一語が澄んだ水のように湧き出し、水滴は緑の葉にしたり、あたりにえもいえぬ香がひろがります。芸術作品としても鮮やかな、作品分析の模範とするに足る。そんなハーンの再話文学論をまとめられました。嬉しく私まで誇りに感じます。というかかすかな嫉妬の情を覚えます。本席においでの皆様も『時をつなぐ言

葉』のまえがきを是非お読みください。言葉は簡潔に研ぎ澄まされ、きちんと整理され知的に述べられているが、それでいて一篇の散文詩です。このプレゼンテーションをお読みになれば必ずやその先も読みたくなるでしょう。

最後に個人的な思い出も述べさせていただきます。三十六年前に私は牧野さんのクラスでハーンをお教えしました。当初は海外帰国子女でもある東大教養学科イギリス分科卒業の大学院生にこんなやさしい英文を教えて授業が成り立つかとあやぶみました。しかし真にすぐれたものは文学作品であれ、学術作品であれ、簡潔に表現されるものです。晩年のハーンの文章がそうでした。今の牧野さんの文章がそうです。それからというものの私たちは内外の学会で、本郷や駒場で、松江や神戸で、ギリシヤやアイerlandやマルティニークで、ハーンについて次々と発表し、ハーンが泳いだ隠岐の海や、ギリシヤや、カリブの海で泳ぎました、もつともトラモアの九月十六日の海は冷たくて私一人しか泳ぎませんでした。このように学問仲間としてまた友として御一緒してきました。このように良き大学で良き学生にお教えしたことを私は一期一会いちごいちえの生涯の幸福にかぞえます。本日は、牧野さん、おめでとうございます。

神道再評価

最新作の『ラフカディオ・ハーンと日本の近代——日本人の〈心〉をみつめて』（新曜社、二〇二〇年刊）の書評はアイerland文学者の榎木伸明早稲田大学教授の『読売新聞』二〇二二年二月二十一日の一文が目を惹い

た。

明治初期に来日したイザベラ・バードやB・H・チェンバレンは文明化とキリスト教を直結させる思考法に慣れすぎていたため、神仏習合と祖先崇拜が結びついた日本の宗教的感性を理解できなかった。チェンバレンは神社の簡素さや神道における理論不在を批判さえした。(牧野) によれば、ハーンはその批判に返答するかの様に「生神様」を書いた。死後に先祖神となり、丘の上の神社にまつられた霊が、参拝者の声を聞いて昔のことを思い出し、里へ下りていくまでの心模様を、神様の一人称で綴った異色作である。著者はハーンの英語原文に邦訳を添え、精緻な評釈を重ねていく。フランス派の読解法(エクスプリカシオン・ド・テキスト)が冴えわたっている。ハーンは理論不在という批判にたいして、神道世界をイメージで示すことよって答えたのだ。

私の長女の足立節子は、この本の表紙に小さく印刷された *Infecadio Heurn's Japan: in interreligious perspective* という英語の副題はこの研究の問題意識を良く言い当てている、と言いつ、カバーの表の「稲田の風景」と裏のハーンのスケッチに注目した(『比較文学研究』書評)。横山孝一氏も同じ表表紙にふれ(『へるん』五八号書評、二〇二一年)、ハーンが《人形の墓》を書いた際に少女にイネの名前をつけたこと、前近代的慣習を軽視して亡くなった兄に「西洋近代と遭遇した日本の行く末の問題」を見ていることを指摘した著者の慧眼を特記している。稲賀繁美は『赤旗』の書評では本書で重きをなしている幕末に福井に来たグリフィスに言及した。グリフィ

その研究を生涯の仕事とした山下英一氏に招かれて私たちは二〇一四年秋に福井に参上した。そのときの牧野発表が『ラフカディオ・ハーンと日本の近代』の中核をなしているので、二〇一四年十月十五日、私が牧野さんに書いた手紙を引くことで、当時の模様を偲びたい。

牧野陽子さま

福井でのご講演は日本語が明るく美しく、今もその声音が私の耳に聞こえ頭の奥で響いています。陽子さまのお話はきちんと見事に整い、グリフィスとハーンの引用が鮮やかに並行して、たがいに照らし合っている。それに陽子さまがさらに美しい光を添えたから、老骨で固く塊りかけた私は感心しました。というか最後の盛り上がり感動しました。「グリフィスとハーンの二人は素朴な神社のたたずまいや人々の簡素な祈りに心動かされた。日本という異国に敬意を払い、異宗教、異文化を認めた」というあなたの結論に私と同じように引き込まれた『福井新聞』の西脇和宏記者に敬意と謝意を表して昨日は葉書を出したほどです。

私は福井の日本英学史学会に山下英一先生との長年のお付き合いに感謝して、またあなたとご一緒に発表しようとして、参上したのですが、学会も晩餐会もいい雰囲気、出かけていいことをしたとつくづく思いました。ユアーズ・ホテルで陽子さまが言葉を選んでご挨拶されたとき、山下様が下を向いたままでしたが、まさか眠り込まれたはずがないとみつけていると、頬に大粒の涙が浮びました。山下様も奥さまも実にいい方でした。人生にはさまざまなご縁があるなと思いました。

東尋坊の青く晴れた海もさりながら、その一番尊いご縁の方と越前鉄道の往復の車中でお話ができまして楽しか

った。

このたびはお花をお贈りくださりお心遣い有難うございます。祐弘・依子謹みて御礼申し上げます。竹山の母の遺影の前に飾らせていただきました。明日で亡くなつて一月になります。八年一緒に暮しました。

またお目にかかれる日を楽しみにいたしております。

牧野家と私

いま話題が出たついでに家族関係の話もさせていただく。前後するが、一九八一年の秋から平川家はヴァンクーヴァーに滞在し、私はブリティッシュ・コロンビア大学で教えていた。するとその年の十二月に『小泉八雲——西洋脱出の夢』でサントリー賞を授けられた。私は帰国せず、授賞式に同じくハーン研究者である牧野さんに代りに出ていただいた。同じ時に東京外大の中嶋嶺雄氏も文化大革命を分析した『北京烈烈』で受賞した。その二、三ヵ月後、シカゴで米国アジア学会が開かれた時、高層ホテルのエレベーターで降下する途中、中嶋さんが入ってきた「サントリー賞ではご一緒できて」と挨拶し、「平川さんの奥さまお若いですね」と言うから、「違います」と言おうとしたが、氏は次の階で外へ出てしまった。さては司会者が、東京会館の授賞式の際、私の代理として受賞した人が誰かきちんとアナウンスしなかったな、という失態を知った。失態と書いたが、中嶋氏の勘違いを思うとエレベーターで下りながら、笑いがこみあげた。帰国後、サントリー賞の裏方の粕谷一希に代理受賞者が誰か言わなかったのは失礼ではないか、と言ったら、「カナダから授賞式に一時帰国しなかった君は失礼

ではなかったか」と逆に注意された。だが昨今と違って当時は太平洋往復の飛行機代は自弁するにはまだ高かったのである。

夫君の牧野治郎氏が国税庁長官になる前、招かれて財務総合政策研究所の夏期トップセミナーで講演したことがある。以前は国家公務員上級職合格者に研修所に講義に行くと「起立、礼」などの号令がかかった時期があった。つい先年まで学生運動で騒いだくせに、この妙な体制内化はなんだ、とその規律正しい変身を腹の中で笑った。しかし平成十九年にもなると、官僚の気質もよほど変わった。講師の前の数列は空席で、教室の後ろの方に聴講者がかたまっている。私は「教室の後ろから三分の一の席には座るな、もっと前にいらつしやい。私の声はよく通るから後ろでも聞こえるが、聴講する者は前の方に座るのが礼儀でしょう」と言い、年配の一人を指さして、前方の席へ移動するように命じた。すると笑いが洩れた。後で聞くと私が前方へ移動を命じた人は財務省のお偉いさんだった由である。

なんでこんな話を書くかと言うと、私は成城大学でも大教室の前の数列はいつも空席で、学生が後ろの方に座っているのは良くない、と不満に感じているからである。「教室の後ろから三分の一の席には座るな、もっと前にいらつしやい。後ろに座っている人から順に当てますよ」と私は講演のたびに繰返した。そして牧野教授に「学生に前の席へ座るよう躰しつぱなさい。それが教育の基本だ」と言ったが、無視された。そのことを遺憾に思っている。

牧野令嬢と私

ここで牧野教授の令嬢美季様にもふれたい。現在本学でも英語を教えている。祖母、母、陽子、美季へとつながる言葉の意味にもふれているので、結婚披露宴祝辞をそのまま掲載させていただきます。

お前百まで、わしゃ九十九まで、ともに白髪が生えるまで と申します。門馬伸幸さま牧野美季さま、ご結婚おめでとう存じます。門馬家、牧野家のご両親様もさぞかしお喜びと存じます。

明治以来来日した外人教師で評判の良い人は小泉八雲ことハーンで、授業を受けた生徒たちのノートを見ますと日本の材料もまじえて教え、この都々逸も *You, till a hundred years; I, until nine and ninety; Together we still shall be in the time when the hair turns white.* と訳しました。戦前の日本史学界の大御所、黒板勝美が熊本高校生のときハーン先生の英語クラスで筆記したノートが昨年見つかりそのノートを復元し、日本語訳をつけさらに論文「ハーンの英語授業の特徴」を書いたのが成城学園高校講師牧野美季さまで、その見事な出来は東大名誉教授の「まえがき」より立派とその「まえがき」を書いた私にわざわざ申した人も居りました。私は前に一緒に旅行した時はまだ幼かった美季さまが堂々となられたと驚き、新郎新婦がよき家族となることをお祈りいたします。

英語の *family* は夫と妻と子供だけが家族で夫婦の両親は *family* にはいらないと先の本の中でハーンは説明

していますが、日本の家族に *family* と別の良さがあること、孝行は美徳であるとハーンは認めました。皆さま、親を大切にする人は良い人です。新婦の母上牧野陽子さまはご両親のお世話をしながらハーン研究のすばらしい御著書『時をつなぐ言葉』で学位をとられました。私はいまから三十九年前、お母様が大学院に進学された時から存じ上げ、御結婚のときもこのホテルへ披露宴に招かれ、本日またご招待に与り嬉しい事に存じます。つい昨日のことのようで母娘二代が重なります。あの時イタリアの女子大学院生が「肌が白くて美しい牧野さん」とはっとする祝辞を述べました。今度の教科書には「肌が白い」を *She is white* と訳すとそれは白人を意味するから間違い、*She is fair* と訳せ、とハーンは申しました。私は良き親、良き娘ともに才色兼備と申しあげます。そして見惚れております。

さて新郎のお仕事とも私は無縁でなく六十年前、日本国鉄とフランス国鉄の間の通訳をし、お蔭で長く留学できました。工学部出の勤勉な国鉄技師を尊敬しました。法学部出にも十河総裁のような迫力のある方もいたが、そうでない単なる優等生もいた。いまの日本社会では大新聞の社説のような模範解答を鸚鵡返しにいえば、そういう優等生は世論に支持され、ある程度出世できる仕組みになっていますが実はそこが落とし穴なので、それは日本の価値体系を作る情報教育空間そのものに歪みがあるからです。新郎はアメリカへ行かれる由、日本の閉ざされた情報空間の外へ出て海外で切磋琢磨されることを祈ります。

ある賢人は「近頃の日本には元旦から朝日を拝まず『朝日新聞』を拝む人がいる。それだから国が歪むのだ」と申しました。新婦の御祖父様は昭和の男でありまして森首相が日本は神の国と発言して新聞から叩かれた時、閣僚として「私は毎朝神棚と仏壇を拝む」ときっぱりいわれました。神国日本は *Japan is a country of*

Shinto gods と訳せば、日本が神道の国であるのは事実なのだから、なんらの問題にもならなかったはずで、『朝日』の記者が Japan is a divine country と訳してけしかけたから問題になったまでの話です。夏の夜の夢のシエイクスピアのイギリスも異教の神ともいっべき a country of fairies であればこそ面白いのと神の国日本が面白いことは変りはございません。

私どもはおおらかに生きたいと思います。それで最後に新婦に戒めを申し述べます。お前百まで、わしや九十九までの都々逸は年が一つ違い、相手を立てるところがよろしいので、近ごろはやりのフェミニストの「お前百まで、わしやも百まで」の男女同権のごりおしでは愛嬌がございません。百までよりも九十九までの方が言葉の音数は長く、そこもめでたいので現にハーンの訳も nine and ninety の方が ninety-nine よりも一音節長く工夫されて、それだけ末永いしあわせの感じを出しております。さきほどお仲人が申されましたように「愛すること、それは一緒に同じ方向をみつめること」regarder ensemble dans la même direction が大事でございます。門馬伸幸さま門馬美季さま、お二人が夫婦偕老の契りをとげられますことをお祈りしお祝いのご挨拶いたします。二〇一五年五月三十一日

大学出版物に婚礼祝辞のごとき私事を掲載するのは困る、といわれそうだが、この御挨拶は英語のニュアンスの説明をちりばめた学術的文章でもあるから、活字に留めさせていただく。

私は内外人、男女を問わず、公平な推薦を心がけた。平川祐弘著作集版『開国の作法』に堀まどか大阪府立大学準教授の《論文指導者としての平川祐弘先生》という一文があり、そこで堀さんは彼女の為に書いた私の推薦

状をそのまま載せて平川の解説とする、ということをあえてした。ひんしゆく 響ひんしゆく 響する向きも無論いた。だが私の反応は違った。堀さんの奇想天外ともいうべき率直さが嬉しかった。「人と業績」を語る際は、体温や息吹を感じさせる内容であっていい。個性のない型にはまった挨拶はしない私は、月並な推薦文も書かない。教えた相手の人柄と仕事を語ることはとりもおさず教えた私自身を語ることになる。博士論文審査を論文提出者が審査される場、と世間は思っているが、実はそのとき審査員その人も自己の力を傍聴人や同僚や論文提出者によって試される。

比較文学は旧帝大の学問分類になかったという意味では新分野である。(旧態然たる日本学術会議にも比較文学比較文化の席はない)。そのためか、故江藤淳(本名江頭敦夫)が東京工大で教授に昇格する際も、他大学の私が「江頭敦夫の人と業績」について推薦状を書くよう依頼された。そこに「近年の氏には国士の面影もあり」と書いたことを記憶している。

「牧野陽子の人と業績」のこの文章も、比較研究が一外国一外国語というナショナルな単位の学問でない故に、私のような老骨が執筆を依頼されたのであろう。もともと牧野さんご本人はまさかこんな形でご自分の「人と業績」が書かれようとは思っておられなかったろう。牧野さんについて書いたこの文章は、見方によっては書く人平川の自伝的スケッチの一節でもあるのだ。書かれた人がきちんとした女性であるから、書く私もきちんとつきあうことができた。良き人間関係であった。私もこんなに楽しい思い出が次々と湧き出るとは思わなかった。温かく、有難く、懐かしい、嬉しい気持ちに包まれている。

比較史的視野の中で研究者に求められる能力

もっともそんな私は、余計な推薦をしてしまったことがある。東大駒場の学際的な交際で私が深く啓発され、しばしば共同研究を行なった同僚の社会科学者は、国際関係論の衛藤藩吉教授だが、氏は「international relationsの学徒は、外国語は二つは習い、比較ができねばならぬ。研究対象国を知悉せねばならぬ。新しい方法論にも関心を払わねばならぬ」といわれた。これは比較文学比較文化の学徒にもそのままあてはまる。私はそれもあって自分たちの学問を国際比較関係論、英語では「intercultural relations」と称した。衛藤氏が亜細亜大学学長に就任したとき有能な人材を求め、推薦を乞われたので牧野さんの名をあげると、衛藤学長はすぐさま直接電話した。牧野さんは成城を去る意思は毛頭なく、断わった。そして他大学へ移らねばならぬような理由もない、と身辺の事情を語り、しまいに私が叱られた。

しかし学際的に比較研究の特色を再考し、積極的に共同研究することは大切だ。人文的アプローチと社会科学のアプローチが重なる論点にふれておきたい。

チェンバレンは明治前期は神道を内容空虚と評し、ハーンと対立した博言学者である。明治末年以後は神道は官僚が発明した天皇崇拜の日本愛国教であると主張した。チェンバレンはその新宗教のチャンピオンは新渡戸稲造でその代表的著作は *Bushido, the Soul of Japan* であるとした。⁽⁴⁾ 新渡戸は日本では国際主義者の代表のようにいわれてきたが、チェンバレンにとっては日本の国家主義者の代表のようにみなされたのである。

そのようなチェンバレンの一連の神道論が、ホルトム(D.C.Holton, *The Political Philosophy of Modern Shintō, A Study of the State Religion of Japan*)などを介して、一九四五年十二月十五日のGHQのいわゆる『神道指令』の基礎となった。米国占領軍が解体ないしは弱体化を図った日本の宗教文化は、はたして彼らが言う通りに悪質なものであったのか、占領軍の見方に従った日本知識人がいまなお繰返すように、神社宗教は悪かったのか。この『神道指令』の問題は国際関係論が扱うべき問題のようではあるが、広い意味での国際比較文化研究論の対象だろう。牧野さんの最新作に神社の姿が次々と描かれているのは、国際場裡に生きてきた彼女の日本的感性の言わずにいられない自己主張がそこに通奏低音として流れている。天皇機関説を唱えた学者たちを圧迫したような、いわゆる神がかりの右翼神道家の国家神道の問題はもちろんあるが、西洋側の解釈にも問題はあるのである。

夕闇に包まれた伊勢神宮で

今回の新著『ラフカディオ・ハーンと日本の近代』の第十章「夕暮れのアイヌ、伊勢の夕闇——イザベラ・バードの『日本奥地紀行』」で、バードが夕闇に包まれた伊勢神宮で受けた印象が *I felt as if the ghosts of the dead ages were after me.* と記されている。バード発言の大事な箇所はこのように英語原文も訳文と共に引用されている。私は最初その英語を聞いたときナイーヴに「これいいですね。神社に参れば誰しも背後になにかを感じるものです」と答えた。神社の社頭に立てば、私たちは何か霊的なものを感じる。私たちは神社の社頭で手を合わせると、亡くなった父母や先祖に見守られているような気がする。しかし明治十一年十一月に宇治山田を訪れた英

国教会の牧師の娘バードにとってそれは「過ぎ去った代々の無数の霊が後ろから迫ってくる」という恐ろしさだった。その肌感覚にバードは戦慄したのである。バードはそこから足早に逃げ去ろうとする。

しかしハーンは神社の神域にとどまり、日本人が死者たちとどう向き合うか、考えようとする。

牧野さんもそこにたたずむ。そんな牧野さんは、バードとハーンの神道へのアプローチの違いを指摘して、判断を下す主体が当然自明としている価値基準や態度そのものをまず吟味した上で、その差異をきめ細かく論じる。その際、英語原文と日本語訳文は必ずしも等価地で同意味とは限らない。私たちは常に英日両文を吟味する必要がある。そのような複眼的な鋭い指摘があるからこそ、この新著には学問的価値がある。バードをただ単に褒めるだけが能の、日本の翻訳者連の月並な紹介——それが従来の日本の外国研究の定型であった——とこの新著はレベルが違う。私はこんな礼状を書いた。

『ラフカディオ・ハーンと日本の近代』はその「はじめに」という考察でもって、ハーンの日本を広く外の「比較宗教的視野」の中にお据えになりました。そのことで、エポック・メイキングな本書の性格が前面に打ち出されました。その特色あるが故に大著となりました。昨今の日本論壇が沈滞している、ということは、戦後日本の知的空間の事情も知るが、それを踏まえてそこからさらにその外へ大きく身を乗り出して世界の中の日本を複眼で眺める大学者や大批評家が見当たらない、ということでしょう。人文・社会の学者はいかにし

(4) Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese*, 1927 & 1939 eds, article 《Bushidō》.

て世界の中の日本を地理的にも時間的にも三点測量しなければならぬか、本書の著者にはその問題意識があり、その方法が各章で実に見事に実践されている。

それにしても「はじめに『知られぬ日本の面影』序文考」は文章の息吹が勁い。そして事物の表裏をよく見ていらつしゃいます。戦前から、そして敗戦後も、日本の論壇や学壇を惰性的に支配してきた、そしていまや力を失いつつある考え方、かつてはあたかもそれが基本であるかに目されていた日本の近代についての考え方のおかしな点が、多々浮かび上がってきた。

私の若い頃は近代化とは西洋化であり産業化でありました。東大の矢内原忠雄も慶應の小泉信三もそう主張しました。小泉信三は皇太子殿下（後の平成天皇）に神道について講義はなさらなかったのではないのでしょうか。大塚久雄は、和魂洋才は不可で、洋魂洋才でなければならぬ、と西洋宣教師の言いそうな理想を口走りました。マルクス主義の唯物史観は習近平も口にしなくなり、東京裁判史観はいまや中国・韓国や、それと連帯する人の日本叩きの道具と化しました。だがそんな座標軸がゆらいできたのは当然でしょう。その種の価値判断基準がかりにグローバル・スタンダードといいかえられたとしても、そんな物差しでもって歴史を裁断していいはずがない。また舶来の色眼鏡で日本の庶民の（心）の正邪を判断していいわけではない。御本の中には、より大きな巨視的といえるタイム・スパンの問題提起が、具体的な小さな事例の微視的考察によって、次々になされています。昨今の世界基準なるものの支持者は、しきりと「政治的公正」political correctnessを言い立てますが、どうもそれが時には相手を黙らせるための装置に墮たしている。そんな擬似正義に固執するから、インターリは近代化の中で見え隠れする日本人の宗教的心性をとらえることができなないのでしょう。そんな中で

「未来にむけた、確認の試み」が本書では確実に行なわれている。牧野陽子はいまや学芸の王道を進んでいらつしゃいます。それが挑戦的で、刺激的で、面白い。

あとがきのドイツの少女時代の「回想」も一篇のよき随筆と感じました。この種の思い出をさらに書き留められるといいですね。